



平成26年度水稻生育診断予測事業速報No. 7 (早植栽培出穂期、出穂後14日調査)

平成25年8月29日現在
栃木県農政部経営技術課

-  **1 胴割粒の発生が懸念される気象条件なので、刈り遅れて品質を低下させないよう、適期に確実に収穫する。**
-  **2 イネ縞葉枯病の発生拡大を防ぐため、再生稲は収穫後早期にすき込む。**

1 気象概況【8月第2半旬～8月第5半旬（宇都宮）】

平均気温は平年並～1.3℃高かった。しかし、降水量は、第2～3半旬が平年比146～157%と多く、日照時間も61～92%と短くなった。しかし、第4～5半旬は一転して降水量は少なくなり（平年比19～62%）、日照時間も平年比104～106%に回復した。

2 調査結果《早植栽培、品種：コシヒカリ、13か所平均》

出穂期調査（表1）

出穂期は、県平均では平年よりも7日程度早く、最終葉齢は0.3葉少なく、葉色は0.5淡い。県中南部では縞葉枯病が発生している。

(1) 分施肥体系（9か所平均）

- ア 7月24日～8月5日が出穂期となり、平均すると7月27日で平年より7日程度早まった。
- イ 最終葉齢は12.9葉で平年より0.4葉少なくなった。
- ウ 葉色は4.0で、平年より0.6淡かった。
- オ 縞葉枯病は5か所で確認され、小山市の発生程度が大きかった。葉いもち、紋枯病、ニカメイチュウが県中部を中心に確認されたが、発生程度は小さかった。

(2) 全量基肥体系（4か所平均）

- ア 7月27日～8月3日が出穂期となり、平均すると7月29日で平年より4日早かった。
- イ 最終葉齢は13.3葉で、平年並。
- ウ 葉色は3.8で、平年より0.3淡かった。
- オ 縞葉枯病は宇都宮市と農試で発生が確認され、葉いもち、紋枯病、ツマグロヨコバイ、カメムシ類の発生も他の地域で確認されたが、発生程度は小さかった。

出穂後14日調査（表2）

稈長は88.3cmで平年より短く（平年比96%）、穂長は19.1cmとやや短い（平年比98%）。穂数は383本/m²で平年よりやや多い（平年比103%）。

(1) 分施肥体系（10か所）

- ア 稈長は平均88.5cmで、平年比97%とやや短い。
- イ 穂長は平均19.2cmで、平年並（平年比100%）。
- ウ 穂数は平均372本/m²で、平年比98%とやや少ない。

(2) 全量基肥体系（6か所）

- ア 稈長は平均88.0cmで、平年比94%と短い。
- イ 穂長は平均18.8cmで、平年比96%とやや短い。
- ウ 穂数は平均408本/m²で、平年比115%と多い。

3 技術対策

今年はお穂期以降、特に出穂後10日間は高温で経過し、胴割粒が発生しやすい気象条件であった（表3）。良質米生産のためには、適正な水管理及び収穫適期の判定、乾燥・調整を行い、胴割粒の発生を助長しないことが重要である。

表3 出穂後10日間の最高気温の平均(°C)

大田原市	宇都宮市	小山市
33.8	34.4	34.6

※ 30°C以上で胴割粒が発生しやすくなる

(1) 適正な落水時期

早期落水は胴割粒の発生を増加させるため、落水時期は出穂後30日以降とし、品質・食味及び収量の向上を図る。その後も高温・多照がつづく場合は、ほ場条件を考慮し収穫7～10日前まで走り水等を行う。

(2) 適期収穫の徹底

出穂後、気温は高めに経過してきたことから、登熟日数（出穂期から成熟期までの日数）は平年より短くなり、現時点で想定される収穫適期（概ね成熟期の4日前～2日後）は表4のとおりである。

刈取適期は帯緑色籾率（穂の元の方で黄緑色をした籾の割合：不稔を除く）と登熟積算気温で判定することが基本であることから、収穫前にはほ場で穂の状態を十分に確認し、帯緑色籾率を見て判断することとする。

収穫は、帯緑色籾率10%（黄化籾率90%）から始め、3%までに終わらせるよう作業を行う。ここ数年、出穂後の高温により収穫適期が早まっているにもかかわらず、刈り始めが遅い傾向にあるので、刈り遅れないよう適期に確実に収穫する。

【刈取適期】

- ◇ 帯緑色籾率10～3%
（帯緑色籾率3%までに刈り終わらせること）
- ◇ 登熟積算気温：1,000～1,100°C

表4 登熟積算気温から想定される5月上旬植コシヒカリ(生育診断ほ)の収穫適期

	大田原市	宇都宮市	小山市
出穂期	7/29(火)	7/29(火)	7/24(木)
登熟積算気温℃ (出穂期～8/27)	727	772	926
8/28以降の平均気温を平年+2℃とした場合に想定される収穫適期	9/7(日)～12(金)	9/4(木)～9(火)	8/30(土)～9/2(火)
土日、祝日を作業の中心とした場合、当該地域で期待される収穫の進捗	9/6(土)～7(日)に始まり、13(土)～15(月)で概ね終了	9/6(土)～7(日)に概ね終了	8/30(土)～31(日)に概ね終了

※ 収穫適期の登熟積算気温:1,000～1,100℃

※ アメダスデータ使用

(3) 適正な乾燥・調製

籾水分25～20%（適正水分）で収穫し、速やかに適正な籾量を乾燥機に張り込む。

張り込み時は水分を確認し、乾燥機の使用マニュアルに従い、毎時乾減率0.8%以下で乾燥を行う。特に、今年度は胴割粒が発生しやすい気象状況になっているので、急激な乾燥は避ける。

また、高水分籾は張り込み後通風乾燥を行い、その後は35℃程度の低い温度で乾燥を始め、逐次昇温し乾燥速度を上げる。（昇温後の毎時乾減率は0.8%以下）

なお、夜間休止乾燥や二段乾燥を行うと、胴割れの増加防止や燃料の節減になる。

【夜間休止乾燥】

籾水分が18%になった段階で乾燥を一時休止し、翌朝仕上げ乾燥する方法

【二段乾燥】

籾水分が18%になった段階で乾燥を中断して、1日程度（24時間）常温通風した後、仕上げ乾燥する方法

さらに、立毛胴割れが見られる場合や籾水分が20%を下回る場合は、次の点に注意する。

◇ 籾水分20%以下（立毛胴割れ）

通常の送風温度より5～10℃低めの送風を行い、毎時乾減率を0.5%程度とする。

◇ 籾水分17%以下

送風のみで対応する。

また、高水分籾は張り込み後通風乾燥を行い、その後は35℃程度の低い温度で乾燥を始め、逐次昇温し乾燥速度を上げる。（昇温後の毎時乾減率は0.8%以下）

仕上げの玄米水分は14.5～15.0%の範囲とし、過乾燥及び水分過多にならないよう十分注意する。

籾摺りは、農機具の使用マニュアルに従って行い、適正な調製に努める。

ライスグレーダーの網目は1.85mmを基本とし、流量に注意して整粒歩合の高い、高品質米の生産に努める。

(4) イネ縞葉枯病の収穫後の対策

収穫後、イネ縞葉枯ウイルスに感染した株から伸びてきた再生稲（ひこばえ）を放置すると、ヒメトビウンカの個体数増加、保毒虫率の上昇を助長する。収穫後は、速やかに耕起して発病株をすき込むとともに、次年産では「とちぎの星」等の抵抗性品種の作付を増やす。

※ 農薬はラベルの表示を確認して正しく使用する。

栃木県農業環境指導センターHP (<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>)



気象災害による農業被害を未然に防ぐため、
技術対策情報が携帯電話等に直接メール配信される
「とちぎ農業防災メール」のご登録をお願いします！

併せて、気象警報・注意報等が直接メール配信される
「栃木県防災メール」のご登録をお願いします！



?「とちぎ農業防災メール」
登録はコチラから



?「栃木県防災メール」
仮登録はコチラから

9月～11月は「秋の栃木県農作業安全確認運動」の実施期間です。



- ・安全作業の第一歩！ 農作業時の身支度は万全に！
- ・「自分だけは大丈夫」と思わないで、いつもの作業も安全確認を！
- ・高齢者の事故が多発しています！余裕を持った作業を心がけましょう。